

ますいさくら
Sakura Masui

A photograph of a woman with dark hair, wearing a white spaghetti strap top, holding a baby. The woman is looking down at the baby with a gentle expression. The baby is looking down at something in its hands. The background is a soft, out-of-focus light color.

ロスト・ベビー *Lost Baby*

ロスト・ベビー

Lost Baby

ますいさくら

Sakura Masui

ロスト・ベイビー

LOST BABY



2002年10月21日 第1版第1刷発行

著 者

ますいさくら

発行者

江口克彦

発行所

PHP研究所

[東京本部]

〒102-8331

千代田区三番町3番地10

文芸出版部

☎03-3239-6256

普及一部

☎03-3239-6233

[京都本部]

〒601-8411

京都市南区西九条北ノ内町11

PHP INTERFACE <http://www.php.co.jp/>

制作協力・組版

PHPエディターズ・グループ

印刷所・製本所

凸版印刷株式会社

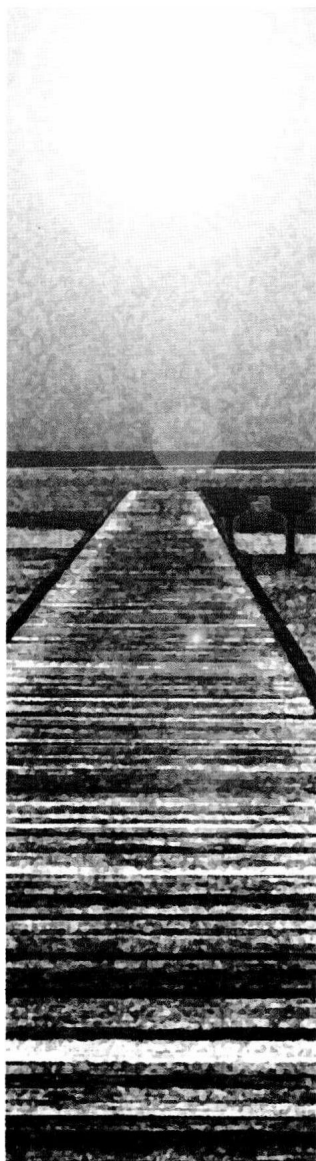
© Sakura Masui 2002 Printed in Japan

落丁・乱丁本の場合は送料弊社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-569-62451-0

ロスト・ベイベー

CONTENTS





生と死——05

ネオン——53

血——77



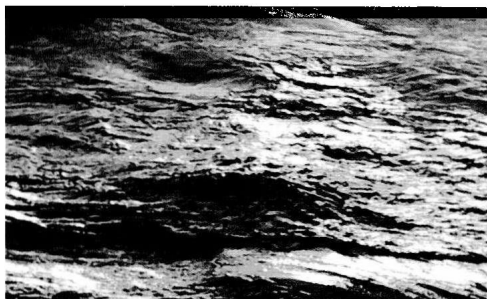


生と死

二十二階のホテルの部屋の大きな窓を開けてバルコニーに出た。朝食用に置かれているテーブルの脇の椅子の上に、スイカ玉ぐらいの大きなお腹を支えるように、手を当てて、ゆっくりと座った。

テーブルの上には、南の国独特の真つ赤なハイビスカスの鉢植えが置かれている。陽が落ちたために、辺りはもう真つ暗で、途切れることのない潮騒の音だけが、何カ月も、誰も訪れる人がいないこの部屋の、唯一の訪問者となって、寂しさを分かち合ってくれる。

夕闇が私の姿を隠し、遠い月が突きだしたお腹だけを、柔らかく照らしている。海辺は、数隻のナイトクルーズの船の灯りと、波が折り返すたびに、白いページをめくるように、いくつもの横に連なる水面のラインがキラキラと闇の中で輝く。半透明の泡たちを岸に寄せては、波は永遠の営みの音を立てる。



ここ、ハワイに来て、二カ月が過ぎている。毎晩、ベッドメイキングに来る、フイリッピン人のメイドが、予定日はいつなのか、家族はいつ来るのか、そして、寂しくないのかと心配して聞いてくる。

「アーム、オーライ」

片手を上げて、無理して笑顔を作っては、メイドと自分自身に言い聞かせる。

アーム・オーライ、私は、大丈夫なの、独りでも。

八カ月前に未婚で子供を身ごもり、それでも着物を着て、帯で必死に、お腹を隠しながら、生活のために、銀座のクラブで働き続けた。

相手との連絡がなかなか取れず、産むこともおろすことも、決心がつかずにいた。だけど、三十歳近い私には、ああ、やつぱりねと、相手にとって別れやすい女だったのかと、自分を笑えば、納得がいく。ずるくなつて、慰謝料をぶんどつて、腐りきるより、馬鹿な女でいたかった。

思い上がった口を持った、若く美しいホステスたちだけが持っている、すべてのわがままが愛らしさに見える期間限定の特権が、銀座の夜に、はびこっている。

ありもしない、おとぎ話を信じて、次から次にあこがれだけを抱いて東京に渡り、夢に破れては夜の街に流れてくる田舎育ちの女たち。

それに群がるのは、金のある、おまえのためになんでもしてやると、口をきく、経済的に成功した男たち。

彼らが、欲しいのは、ホステスたちの若くて恐れを知らない、狙った獲物を仕留めるための、「無駄のないしなやかな肉体」。それに、触れたいだけ。

初めて、自分に結婚しようと、耳元でささやいてくれた、初夏の若葉が薫る季節の約束は、口約束として喉元を通り過ぎ、いつしか秋の枯れ葉として道端に落ちて、散り散りに形も残さずに消えていく。あんなに誓い合った言葉は、空っ風に飛ばされ、冷たい冬を、連れてくる。

現実だけが、目の前に、残される。現金書留の茶封筒に入っていた三十万円は、赤の他人が、仕事として、書留という形でアパートの玄関に運んできただけ。

私は、哀しく迷いながら、判を押す。

この金額では、愛が足りないね、この値段では、子供は育てられないよね。彼に



言いたいだろう、ひとつひとつの言葉を、過ぎた五月のゴールデンウィークの日々に問いかける。彼と逢った日に印をつけていた、過去の手帳の頁を指でめくることはできるのに、過ぎた季節には加えることも引くこともできない重みがある。己の甘さを悔やんでも遅い。

落ちるところまで堕ちたら、ひとりでも生きていけるかなって。すがりたいたい男を見失ったぶん、自分でお腹の子を守りたい、この子だけは、何人も、傷つけることはできない。
なんびと

検査のために出向いた病院の産婦人科の待合室に、一人で座る。自分が座った長椅子だけが、孤独を共有してくれる。付き添いの母親や、やさしいご主人たちが、未来をお腹に抱えた女王様たちの周りに座り、忠実な家来のように世話をやいている。初めての妊娠ではしゃいでいる女たちを、複雑な気持ちで見ている。

私の胎児も、そいつらの胎児も、同じ一〇cmくらいの塩辛で、エコーで映し出される姿は一緒なのに、私の赤ちゃんは、一〇cmの体全体



で私の不安と悲しみを敏感に感じ取っているかのように、体をきつく丸めて、性別さえも教えてくれない。

ドクンドクンとお腹の中のへその緒を通じて、私の悲しみが、この子に流れている。哀しみの膜の中でその子は考える。どっちだったら喜んで産んでくれる？ それとも、どっちでも悲しい？

教えてあげないよ。母さんが、犯罪者のように太陽に背を向けて、背中を丸めて、誰とも目が合わないようにお腹を隠して、道の端を歩いているうちはね。

産むのか？ 墮ろすのか？ 若さにまかせて、十代で故郷を飛び出してきた私には、今さら、相談できる相手もない。でも、この子を墮ろすことによって、一体自分に何が残って、何を守ろうというのだろうか。

だけど、私には日本で育てる自信がなかった。大人になるまで、繰り返しいじめられ、不利な扱いを受け、私生児というだけで本当の自分を見てもらえない現実が待っている。

日本を捨てて、この子と海外に渡り、不法就労で働いて、異国の街で、誰も私を

知らない場所で、人生をやり直せたら……漠然と思った。この子以外、全部を捨ててしまつたらどんなに楽になるだろう。

リセットした気持ちは、失つた夢すら、私に運んでくる気がした。

子供が、親の国籍にかかわらず、生まれた国の国籍を取れるのは、日本から十三時間かかるカナダと地球の反対側のニュージーランドと、そして八時間のアメリカ・ハワイ……。

カレンダーには、今月のすべての日にちの上に、出国と書いてある。いつ、日本から、この身重の体で旅立とうか？ 毎晩、自問し、毎朝、躊躇して、扉が開けられず、部屋の中に閉じこもる。

最後に一度だけ、あの人に連絡を入れようと思い、電話をした。受話器を握りしめる手が、かすかに震える。

「私のこと、忘れちゃったの？」

「忘れたいんだ」

この一言で、アパートを解約して、すべての家財道具を処分できた。貴金属や着



物は質屋に売り払って、金に換えた。

最後に、見捨てられなかった、このお腹の命だけを抱えての出国だった。

搭乗許可ギリギリの出産、三カ月前の最後の二重丸がついている日に、私はショルダーバッグ一つで成田空港に向かった。

医者から、流産の危険性があるから、重たい物は、持つてはいけない、お腹に余計な力を入れてはいけないと注意されていた。

いままで、人の話に耳を貸したことのない私が、忠実に、かたくななまでに、医者の言葉を守っている。

どんな運命が待っているかなど、考える余裕もなかった。妊娠八カ月で、重たいスーツケースひ

とつ持てず、私が道連れに選んだのは母子手帳と、安産を祈りに行つた、神社で買った産着一枚を入れた鞆だけ。

八カ月のお腹で、来月には、臨月を迎える自分には、八時間のハワイへのフライトは、かなりの重労働だった。迷いがなかったといえは、嘘になる。ハワイへは、一度も行ったことがなく、それでも選んだのは、一番近い、自由の国アメリカだったからだ。

現地での、滞在先すら、決め

ていなかった。ただ、世間から、遠ざかることを、望んだのかもしれない、だから、ホテルの予約なんて関係なかった。人の気持ちに、予定表はないのだから。

重たい体を、横たえることができないほど狭い、エコノミークラスの機内で、正面にかかっているスクリーンに描かれた小さい飛行機が日付変更線を越えた時に、理由もなく涙が溢れた。五人掛けの通路側なので、窓からの外の様子が分からない。もしかすると、この胎内の子と一緒にの気持ちかもしれない。お腹をさすりながら、ねえ、帰ってくるときは、この日付変更線を、二人で越えようねと、話しかけた。子供はまるで、返事をするように、ぼんぼんとお腹を蹴ってくれた気がした。もう、大丈夫、自由の国アメリカに来たからね。ここまで来てようやく分かったことがある。もう、一人ぼっちじゃない。そう、大切なことはいつも、一番最後に気づいてしまう。

流れ着いた土地には、何かいいことがあるような、少なくとも、未婚の母という窮屈な日本の古い偏見から、逃れられるのは確かだ。子供の数が少ないと言われるなか、人口増加に貢献しても、父親がいない子供の背中には、偏見が付いて回ると